

■ 学校の共通目標

| | | | | | | |
|------|----|---|------|---|------|--|
| 授業作り | 重点 | 多様な学習形態を、児童一人一人の実態や課題に即して計画的に取り入れるとともに、形成的な評価を効果的に指導に生かすことで「分かる」授業を目指す。 | 中間評価 | ICT機器の活用とともに、少人数習熟度別の学習や日本語習得のための取りだし授業などに取り組んだ。授業の終わりに振り返りを行うことで評価に生かした。 | 最終評価 | 授業における一斉指導や個別指導の場面、協働的な学習の場面等におけるICT機器の効果的な活用について校内研究で研究を進めた結果、児童の実態に応じた指導を行うことにつながり、学習への関心・意欲が高まった。さらに学力調査の結果につなげていく。 |
| | | ICT機器の活用の仕方を検討したり、読書活動の充実のさせ方を検討したりしながら、児童が主体的に学習に参加できる授業の実践を行う。 | | ICT機器を積極的に活用できるように研究を重ねた。「ICT機器の活用は手段であること」を意識して効果的に活用できるようにしている。 | | デジタルドリル等を効果的に活用することにより、児童が自分に合ったペースで予習や復習に取り組むことができた。今後は、各教科等の学習のねらいを確実に達成することができるようICT機器の活用をさらに進める。 |
| 環境作り | | | | | | |

■ 学年の取組内容

| 学年 | 教科 | 学習状況の分析 (10月) | 課題 (10月) | 改善のための取組 (10月) | 最終評価 (2月) |
|----|----|---|--|--|---|
| 1 | 国語 | <ul style="list-style-type: none"> 学 児童の授業評価では、7割の児童がよく分かる・分かったと解答している。ワークテストにおいても9割に近い正答率である。 学 拗音・促音・助詞など言語に関する事項に課題がある。 学 全体やグループにおいて考えを共有することはできるが、自分の行動したことや経験したことに基づいて、相手に伝わるようにスピーチすることに課題がある。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ひらがなや漢字の字形を整えること。 ・拗音や促音・助詞などを正しく表記すること。 ・相手に伝わるように、経験したことに基づいて、話す事柄を考えること。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ひらがな・カタカナ・漢字など新出の内容の指導を丁寧に取り組み、習熟の機会を多く設定する。 ・文章を書く活動や文章を読む活動を通して、文字や日本語の規則などの理解を高める。 ・朝の会などを使って、伝えたいことを話す機会を多く設定する。 ・デジタルドリルを授業・家庭学習等で計画的に活用する。 | <ul style="list-style-type: none"> 学 毎日の漢字学習の際に確認テストを行ったり、授業や家庭学習においてデジタルドリルに取り組んだりすることで、ワークテストにおいて86%の児童が8割程度正確に文字を書くことができた。より正しい字形で丁寧に文字を書くことについては、今後も指導を継続する。 学 朝の会でのスピーチや週末の日記に取り組むことで、相手に伝わるように話したり、文章を書いたりすることへの意識が高まった。より分かりやすく、正確に話したり、文章を書いたりできるように継続して取り組む。 |
| | 算数 | <ul style="list-style-type: none"> 学 児童の授業評価では、6割の児童がよく分かる・分かったと解答している。ワークテストにおいても9割に近い正答率である。 学 簡単な加法・減法計算をすることができる。計算が苦手な場合も、計算ブロックをつかったり、図に表したりすることで解決することができる。 学 多様な考えをもつ活動については意欲的に取り組むが、考えを表すことに課題がある。 | <ul style="list-style-type: none"> ・数に関する理解や簡単な計算力を身に付けること。 ・解き方など考えを表すこと。 | <ul style="list-style-type: none"> ・ICT機器を活用した視覚的な提示を行い、理解を深める。 ・計算の際に、具体物操作や図などで処理する機会を意図的に設けることで、計算の仕方の理解を深め、暗算で計算ができるようにする。 ・考え方を、言葉、図、式など多様な表現が出来るように考えを書く時間を設定する。 ・デジタルドリルを授業・家庭学習等で計画的に活用する。 ・計算の練習に毎日デジタルドリルに取り組ませる。 | <ul style="list-style-type: none"> 学 ほぼ全児童が正確に計算をできるようになった。一方で正確に計算をするのに、長い時間を要する児童がいる。計算練習の機会を増やすとともに、デジタルドリルを活用して、正確に、「より速く」計算ができるようにする。 学 概ね全ての児童が、自分の考えをノートに記すことができるようになってきた。苦手な児童には、ヒントを示したり、一緒に考えを表したりする支援を通して、児童が自分の力で考えを書くことができるよう指導を重ねていく。 学 デジタルドリルを活用することで、児童が主体的に予習・復習に取り組むことができた。 |

| 学年 | 教科 | 学習状況の分析 (4月) | 課題 (4月) | 改善のための取組 (4月) | 中間評価・追加する取組 (10月) | 最終評価 (2月) |
|----|----|---|---|---|--|---|
| 2 | 国語 | <ul style="list-style-type: none"> 学 登場人物の気持ちを考え、工夫して音読することを楽しんでいる児童が多い。 学 意欲的に学習に取り組んでいる児童が多い。 学 漢字学習にも集中して取り組むことができるが、定着と活用に課題がある。 学 読書が好きな児童が多い。 | <ul style="list-style-type: none"> ・「てにをは」や平仮名の拗音や促音、片仮名、漢字を正しく用いること ・物語や説明文を読んだ感想を、文章化すること ・漢字の定着 | <ul style="list-style-type: none"> ・毎週日記を書くことで、文章を書くことを習慣化し、その中で、「てにをは」や平仮名の拗音や促音、片仮名などを意識させ、学習した漢字も使わせる。 ・初発の感想と読後の感想を書くときに、文章に表すことができない児童には、感想を尋ね、その内容を文章化させ、書くことへの自信をもたせる。 ・デジタルドリルを活用し、筆順の定着を図り、小テストで字形やとめ、はね、はらいの定着を図る。 | <ul style="list-style-type: none"> ・朝学習の時間で、筆記の練習をしったりすることで、書くことへの抵抗感を減らす。4月よりも正答率が上がっているので継続していく。 ・話型を使って話をする場面、文型を使って文章を書く場面を設定し、児童が自分の考えを表現しやすいようにする。 ・漢字の定着には個人差があるので、宿題や朝学習でデジタルドリルを活用し、習熟を図る。 | <ul style="list-style-type: none"> 調 漢字を読むことについては、8割の児童ができています。 調 話し手が知らせたいことを落とさないように聞くことは、7割の児童ができていますが、話題に沿って質問を考えることは課題がある。 調 文章を読み取ることに課題がある。 学 表記の間違いが全体的に減ってはきたが、まだ間違えてしまう時があるので、指導を継続していく。 学 書くことに抵抗を感じる児童は減少した。 |
| | 算数 | <ul style="list-style-type: none"> 学 計算問題は正確に解くことができる児童が多いが、文章問題の題意の理解には課題がある。 学 家庭学習の取り組みは、ほとんどの児童ができています。 学 自力解決の際、自分の考えをもつことにやや課題がある。 | <ul style="list-style-type: none"> ・文章問題から、聞かれていること把握すること ・自分の考えを、図や言葉などで表現すること | <ul style="list-style-type: none"> ・問題文をICT機器を活用して視覚化し、題意を具体的にイメージできるようにする。 ・具体物を使ったり、考えを書いたり話させたりして言語化させ、考えを表現することを支援する。 ・習熟度別指導を展開し、時間配分など、個に応じた指導をする。 | <ul style="list-style-type: none"> ・デジタルドリルで宿題を配信し、習熟を図っている。 ・朝学習や授業の開始時に計算問題に取り組んでいる。10や5の構成分解が苦手、簡単な計算に躓いてしまう児童がいるため、毎時間続けていく必要がある。 | <ul style="list-style-type: none"> 調 文章を読み取ることが苦手なため、文章問題を解くことに課題がある。 調 繰り下がりのあるひき算について課題がある。 調 簡単なかけ算については、9割の児童が解くことができています。 学 毎時間の始めに、百マス計算を行うことで、計算のスピードや正確性が向上した。 学 自分の考えを表現することは、できるようになってきた。 |

| | | | | | | |
|---|----|--|---|--|--|--|
| 3 | 国語 | <p>調 観点別の正答率を見ると、ほぼ全国平均正答率と同等である。物語を読み取る領域は、読書に親しみ本好きな児童が増えてきていることから向上が見られる。片仮名や漢字については、日常のテストにおいては8割近くの児童が正しく書くことができているが、引き続き指導する必要がある。</p> <p>学 日常的に文章を書く時間を意図的に設定したことで、感想文・説明文・物語文・観察文の違いを意識しながら文章を書く力が身に付いてきた。</p> <p>学 朝自習などで読書に取り組む時間を確保してきた。その結果、すすんで読書をする児童が増えた。</p> | <ul style="list-style-type: none"> 漢字の習得状況に個人差があること 既習の漢字を使わずに文章を書く児童もいる 文章の叙述に基づいて登場人物の心情や場面の様子を読み取り、自分の言葉や文章で表現する力が十分に身に付いていないこと 文章を読み間違えずに正しく音読すること | <ul style="list-style-type: none"> 新出漢字の学習や練習を授業時間内に確保することで、児童の習得状況を確認し、誤字はその場で正しく直させるようにする。 文章の読み取りでは、事実と想像を区別させて、文章の叙述を根拠にして自分の考えを表現させるようにする。 学級全員で音読するだけでなく、一人一人音読する時間を設定し、個人の音読の状況を把握し、正しく読めるように指導する。 | <ul style="list-style-type: none"> 新出漢字の学習の際に誤字をその場で直させることで、新出漢字を正しく書くことができる児童が増えてきた。 自分の考えや感想を書く際には、考えたり、感じたりした根拠として叙述を引用させるように指導している。 教科書を各自で音読する時間を十分に確保するようにしている。 | <p>調 全ての項目で目標値を下回った。特に「メモをもとに文章を書く」は 28.3%、「文章を書く」は 18.3%と極めて正答率が低い。最も正答率が高い「漢字を読む」でも正答率は 78.9%で、目標値を 4%ほど下回った。観点別正答率では「主体的に取り組む態度」が 32%と低く、学習に取り組む意欲や態度も向上させていく必要がある。</p> <p>学 新出漢字の練習は授業時間内に確保し、誤答は正しく直させた。漢字を正しく書こうという意欲をもてる児童が少しずつ増えてきた。自分の考えや気持ちを文にするときには、友達の書いた文を参考にさせることで、自力で文を書こうという意欲をもてる児童が少しずつ増えてきた。</p> |
| | 算数 | <p>調 観点別の正答率をみると、ほぼ全国平均正答率と同等である。家庭学習も含めて反復練習を継続し、今後も着実な力を付けていく必要がある。</p> <p>学 I C T機器を活用したり、具体的な操作を行ったりすることで、児童が問題を自力で解決できるようになってきた。</p> <p>学 文章題を苦手とする児童が多いが、日々の授業において問題を作ったり、友達と解決したりする活動を取り入れることで改善が見られた。</p> | <ul style="list-style-type: none"> 学習の定着状況の個人差が非常に大きく、個別指導を必要とする児童の割合が多いこと 問題文を正しく読み取って題意を理解すること | <ul style="list-style-type: none"> たし算やひき算、かけ算については、朝学習や家庭学習などを活用して、年間を通して反復練習を継続する。 具体物や ICT 機器を活用することで、児童が具体的なイメージをもてるようにする。 問題文を I C Tを活用して視覚化し、問題場面を具体的にイメージできるようにする。 | <ul style="list-style-type: none"> 繰り下がりのあるひき算や、かけ算に苦手意識をもつ児童が少なくない。今後も反復練習を継続していく必要がある。 具体物や ICT 機器を活用することで、問題場面等を具体的にイメージできる児童が少しずつ増えてきた。問題場面を友達と説明し合う活動なども取り入れていきたい。 | <p>調 全ての項目で目標値を下回った。特に「10000 より大きい数」「かけ算」「わり算」「円と球」は目標値を10%以上下回るなど課題が大きい。観点別正答率では「思考・判断・表現」が 34.2%と低く、学習したことを活用する力に課題のある児童が多いことが分かる。</p> <p>学 学習によって習得した知識や技能が時間の経過とともに大きく減少する児童が目立つ。既習事項について、年間を通して反復練習をする必要がある。また、かけ算九九や、繰り上がりや繰り下がりのあるたし算、ひき算が十分に定着していない児童が複数名おり、個別指導が必要である。</p> |
| 4 | 国語 | <p>調 「話し合いの内容を聞き取る」は目標値より 3.3%高い。「漢字を読む」は 2.4%高い。一方、「漢字を書く」「言葉の学習」「物語の内容を読み取る」「説明文の内容を読み取る」は目標値より 0.9～1.7%低い。後半に出題されていた「文章を書く」については、2/3 の児童がそこまで辿り着いていないため目標値を大きく下回っている。物語文や説明文を読んで理解することに時間がかかるため、単元末のワークテストだけでなく練習問題にも取り組み、応用力を付けていく必要がある。</p> <p>学 物語文においては、登場人物が「見たこと・聞いたこと・したこと・言ったこと・思ったこと」に注目することで、場面の様子や心情の変化を叙述に即して読む力が身に付いてきた。説明文においては、「問いと答え」の関係や「はじめ・中・終わり」の文章構成を適切に指導し、段落ごとの内容の読み取りを丁寧に行ったことで要旨を捉えられる児童が増えた。書くことにおいては、主語・述語ははっきりしているものの、「すごかった」「おもしろかった」など、内容が抽象的で分かりづらい文章を書く児童がいるため、「いつ・どこで・だれが・何を・どのように」といった項目を意識した書き方を指導していく必要がある。</p> | <ul style="list-style-type: none"> 漢字を適切に書いたり、既習の漢字を使って文章を書いたりすること 順序立てて話したり、要点を押さえて聞いたりすること 文章の構成を考えたり、文と文のつながりを考えたりして、分析的に読み取ること 適切な表現で分かりやすく書いたり話したりすること 外国籍の児童も多く、語彙の習得数を多くすること 文の構造を身に付け、適切に文章に表すこと 論理的な思考を、文章で表現できるようにすること | <ul style="list-style-type: none"> 図書の時間を活用して、読書に親しみ文章に慣れさせる。 朝学習や放課後学習、家庭学習を通して漢字の定着を高める。 朝や帰りの会、各学習活動の中で、話型指導、聞く姿勢の指導をし、話すこと・聞くことの力を高められるようにする。 新出漢字の書き順や用法をノートに書きまとめるようにする。 語彙力を伸ばすために、辞書を個別に用意して日常的に調べられるようにする。 文章を書く機会を増やして文章力を高められるようにする。 文章の構成を考え、文と文のつながりを、手掛かりとなるつなぎ言葉を意識させるようにする。 主語・述語の関係を意識しながら、文章を書くようにさせる。 根拠を明らかにして、読み取ったり文を書いたりさせる。 | <ul style="list-style-type: none"> 図書の時間や朝読書の時間で読書の機会を確保した。物語などの長文を読む児童が増えてきた。 漢字ノートやスキルを使い、繰り返し練習したり、用法を確認したりすることで定着が図られつつある。また、毎週行う小テストで確認をし、約半数が満点を取れるようになった。 朝会の時に、聞いた話の要点をまとめたり、感想を書いたりすることで、聞く力が付いてきた児童がいる。伝えたいことを要点としてまとめられるようにしていく。 読み取りの学習で、記述に即して登場人物の心情を考えるように促すことで、良い表現の仕方を身につけられるようになってきた。 日本語が母語ではない児童、外国からの転入の児童に、日本語教室の先生と連携して、1～3年生の漢字の習得、算数の学習の補習をしていく。 | <p>調 「漢字を読む」は 1.5%、「漢字を書く」は 6.7%、「物語の内容を読み取る」は 2.2%、目標値より高かった。しかし、「話し合いの内容を聞き取る」は 6.9%、「言葉の学習」は 5.7%、「説明文の内容を読み取る」は 10.5%、「メモを取りながら話し合う」は 5.6%、文章を書くは 16.7%低かった。観点別正答率では、「主体的に学習に取り組む態度」が 12.7%と低かった。用意されている学習内容を真面目に取り組むことは、良くできているが、発展的に取り組んだり学習したことを活用していく活動を増やしていったりする必要がある。</p> <p>学 漢字練習は繰り返し取り組んだことで、児童も自信をもつことができた。また、物語文では、主人公の気持ちの変化に着目して丁寧に読み取ることで、学習が楽しいと感じ、さらに進んで取り組むことができた。説明文の理解や、聞き取りの力については論理的に解釈する力のため、ノートのまとめ方を工夫したり、相手の伝えたい要旨を捉えながら聞く練習を繰り返したりする必要がある。</p> |

| | | | | | | |
|---|----|--|---|---|---|---|
| | 算数 | <p>調教科の正答率においては、前年度は目標値よりも5.8%低かったが、今年度は、目標値を下回ったものの0.5%のところまで正答率が上がった。基礎項目については0.6%上回っており、基礎・基本となることは身に付いていると考えられる。内容別の正答率では「たし算・ひき算」や「かけ算」、「長さ・重さ」、「時ごとと時間」については目標値を上回った。一方、「10000より大きい数」や「わり算」、「円と球」は目標値より低く、特に「わり算」は目標値を7.6%下回っている。活用項目について目標値より2.4%下回っているため、文章題などを通して普段の生活の中での活用力を付けていく必要がある。</p> <p>学習熟度に応じた学習を繰り返し行うことで、基礎・基本を定着することができた。また、毎回の学習において教師用デジタル教科書を活用し、問題場面の視覚化や図形の操作を見せることで、より具体的に場面を捉えさせる手立てとなった。さらに、朝学習や放課後学習において既習事項の定着を図ったことで基礎・基本が身に付いたと考えられる。一方、ワークテストなどにおいて、文章題となると場面が捉えられなくなる児童がいるため、題意を理解する力を付けていく必要がある。</p> | <ul style="list-style-type: none"> 基本的な計算力の定着状況に個人差が大きいこと 題意を正確に読み取ることができないこと 時間、長さ、かさ、重さ等の量感をイメージして考えること 課題解決の方法を考え、文章や図で表現すること | <ul style="list-style-type: none"> 習熟度別の学習では、レディネステストの結果を参考にして、グループ分けを行い、個に応じた問題数で繰り返し練習させ、基礎・基本の定着を図れるようにする。また、児童の実態に即して、発展的な学習もできるようにする。 筆算の方法など、分かりやすく提示し、習得しやすくする。 問題の中に生活場面を入れることで、身近なことで習得した学習事項を活用することができるようにする。 長さや重さ等、具体的な物を操作する算数的活動を多く取り入れ、具体的なイメージをもって考えられるようにする。 単元にとらわれない、継続的な繰り返し学習を適宜取り入れる。 問題内容をイメージしやすい数直線図や線分図等に表示して考えられるようにする。 | <ul style="list-style-type: none"> 均等割りグループでは、互いに教え合う姿が増えてきた。答えをそのまま教えるのではなく、やり方を説明するように重ねて指導していく。 わり算の筆算では、定着を図るため、毎朝3問ずつの計算に取り組んだ。ほぼ全員が正解できるようになった。 具体物を使うことでイメージがしやすくなっている様子が窺えた。生活場面での具体的な用法などを取り入れていく。 家庭学習では、復習問題を取り入れて繰り返し学習をしている。 | <p>調教科の正答率は、2.2%低かった。内容別正答率では、目標値より「わり算」は、3.1%、「小数」は3.6%、「角の大きさ」は4.1%高かった。一方、「億と兆、概数の表し方」は、8.9%、「計算のきまり」は、3.3%、「垂直・平行と四角形」は7.1%、「折れ線グラフ」は、9.4%低かった。計算問題のように、繰り返し練習できる内容は定着していたが、問題場面を理解し、状況を整理した上で根拠をもって立式するといった設問の正答率は低くなっていた。丁寧に段階的に手順を踏みながら考える力を身に付けさせる必要がある。</p> <p>学学習内容が定着していない児童には、放課後学習や休み時間を使って個別に対応し、問題に取り組む方法を指導した結果、意欲を引き出すことができた。また、家庭学習などで既習事項を繰り返し復習することも有効であった。線分図や数直線図等、問題場面分かりやすく表す学習方法を、定着させることができるよう指導を進める。</p> |
| | 国語 | <p>調話合いの内容を聞き取る力、物語の内容を読み取る力、漢字を読む力は目標値と同様または上回ることができた。文章を書くなど主体的に学習に取り組むことは20%近く低かった。興味・関心が低い内容でも、主体的に取り組む手立てを講じていく必要がある。</p> <p>学物語の登場人物の心情を想像して書いたり、自分の考えをノートに記述したりすることができるようになってきた。しかし、説明文を構造的に読み取ることなど、思考を組み立てて学習することに課題がある。段落相互の関係や接続詞、主語と述語などの指導を丁寧に行っていく必要がある。</p> | <ul style="list-style-type: none"> 漢字を適切に書いたり、既習の漢字を使って文章を書いたりすること 順序立てて話したり、要点を押さえて聞いたりすること 語彙の習得数を多くすること 文章構造について理解し、適切に文章に起こすこと 論理的な思考を、文章で表現できるようにすること | <ul style="list-style-type: none"> 読書の機会を設け、習慣を身に付けさせ、文章に慣れさせる。 朝学習や放課後学習、家庭学習を通して漢字の定着を図る。 朝や帰りの会、各学習活動において、話型の指導や、話の聴き方を指導し、話すこと・聞くことの力を高める。 新出漢字の書き順をプレゼンテーションソフトのアニメーション機能を活用して確認したり、デジタルドリルを活用して確かめさせたりする。それらの動きに合わせて空書きすることで正しい筆順の定着を図る。 分からない言葉が出てきた時には、教師がすぐに教えるのではなく、国語辞典を活用して言葉の意味を調べさせ、語彙力を高めていく。 自分の考えを書いたり、振り返りを書いたりすることで文章を書く機会を増やし、文章を書く力を高める。その際に、例文を示し、書くことを苦手とする児童への手立てとする。 | <ul style="list-style-type: none"> 読書に親しみをもち、児童自らすすんで読書をする児童が増えてきた。物語の内容を読み取る力を育みたい。 ドリル教材を軸に漢字の学習を進めながら、朝学習や放課後学習の際にデジタルドリルも活用して練習する回数を増やした。書く量を増やしたことで定着に繋がった。 考えを交流する場면을意図的に設定し、交流の前に話型の指導や、話の聴き方の指導を行った。年度当初は型に当てはめるだけになってしまい、ぎこちなさがあったが、繰り返し指導することで話し方や聴き方が身に付いた。 分からない言葉を国語辞典やタブレット端末を活用して調べさせたことで、語彙を増やすことができた。 自分の考えを書いたり、振り返りを書いたりする場면을意図的に設定し、内容についての指導だけでなく、文法指導も同時に行うことで、文章の書き方が身に付いてきた。 | <p>調問題の内容別正答率について、前年度からの経年変化をみると、「説明文の内容を読み取る」が大幅に上昇し、目標値よりも2.1%高い結果となった。また、「漢字を読む」は目標値より0.7%高い。領域別正答率については「書くこと」が10.5%、「読むこと」が16.7%、前年度よりも上昇した。読書の機会を意図的に設定し、習慣を身に付けさせる指導をしてきた成果である。</p> <p>学物語文においては、登場人物が「見たこと・聞いたこと・したこと・言ったこと・思ったこと」に注目することで、場面の様子や心情の変化を叙述に即して読む力が身に付いてきた。説明文においては、「問いと答え」の関係や「はじめ・中・終わり」の文章構成を適切に指導し、段落ごとの内容の読み取りを丁寧に行ったことで要旨を捉えられる児童が増えた。書くことにおいては、主語述語ははっきりしているものの、内容が抽象的で分かりづらい文章を書く児童がいるため、5WIHを意識した書き方を指導していく。</p> |
| 5 | 算数 | <p>調どの項目も目標値を下回った。観点別では知識・技能と主体的に学習に取り組む態度は-5%だったのに対し、思考・判断では-7%と低い。具体的にイメージできる小数や折れ線グラフなどは-2%だが計算のきまりは-14%とかなり目標値を下回っている。具体的にイメージできるように視覚的に指導したり、繰り返し復習したりしていく必要がある。</p> <p>学練習問題などの課題に進んで取り組めるようになった。思考力を問われる問題には戸惑いが大きい児童がいる。スモールステップでの指導を行うことで自力解決の力を付けていく。</p> | <ul style="list-style-type: none"> 学習内容の定着度の個人差が大きいこと 題意を正確に読み取ることができないこと 時間、長さ、かさ、重さ等の量感をイメージして考えること 課題解決の方法を考え、文章や図で表現すること | <ul style="list-style-type: none"> 習熟度別の学習では、レディネステストを使用してクラス分けを行い、個に応じた問題数で繰り返し練習をすることで、基礎・基本の定着を図る。また、児童の実態に応じて、発展的な学習も取り入れていく。 問題の中に生活場面を取り入れることで、問題場面を具体的に捉えさせ、学習したことを応用する力を身に付けさせる。 長さや重さ等、具体的な物を操作する算数的活動を多く取り入れ、具体的なイメージをもって考える力を高める。 単元にとらわれない、継続的な繰り返し学習を適宜取り入れる。 朝学習や宿題にデジタルドリルを活用し、習熟を図る。 | <ul style="list-style-type: none"> レディネステストを使用したクラス分けにより、個に応じた問題数を設定することで、基礎・基本の定着を図ることができたので、継続して取り組む。基礎・基本が定着している児童については、プリントやデジタルドリルを用いて発展課題に取り組みさせることで、学びを深めることに繋がった。 生活場面を取り入れた指導を進めているが、文章問題を苦手とする児童が一定数いるので、引き続き、より具体的な場面を設定して問題を捉える力を身に付けさせていきたい。 定期的に「ドリルパーク」を宿題として位置づけ、家庭学習の充実を図った。個別最適化を意識した出題を行い、児童一人一人の理解度に合わせたフォローアップを行うことで、理解度の低い児童の習熟を図ることができた。 | <p>調領域別正答率について、前年度からの経年変化をみると、「データの活用」が15.4%上昇した。また、「図形」は13.2%上昇した。習熟度別指導を充実させ、基礎・基本の定着を図ってきたことが効果に表れた。一方で、教科の正答率については、「活用」が8.1%下降した。小問別解答と正誤状況より、文章問題における無回答率が高いことと、前半に設定されている計算問題等に時間を費やし、後半に設定されている問題に辿り着けていない児童がいることが要因として挙げられる。基礎・基本の定着を引き続き行っていくことと、数的処理を向上させるための反復練習や生活場面を取り入れた実践的な指導を行っていく。</p> <p>学習熟度に応じた学習を繰り返し行うことで、基礎・基本を定着することができた。また、毎回の学習において指導者用デジタル教科書等を活用し、図形の操作を見せるなど問題場面を視覚化する支援を行うことで、より問題場面を具体的に捉えさせることができた。さらに、朝や放課後の学習において既習事項の定着を図るための取組を行ったことで基礎・基本が身に付いた。一方、ワークテストなどにおいて、文章問題では、場面が捉えられなくなる児童がいるため、題意を理解する力を付けていく必要がある。</p> |

| | | | | | | |
|---|------------------|---|---|---|---|--|
| | <p>国語</p> | <p>調問題の内容別正答率について、令和元年度からの経年変化をみると、いくつかの観点において正答率が上がった。特に、言葉の学習では、正答率が目標値より5.6%上昇した。昨年度の校内研究から実践している「一人読み」の場面で、叙述に即した自らの読みを言語化させる活動を継続して取り組んだことが効果に表れたと捉えることができる。また、国語科で書く活動を充実させたことはもちろん、他教科・他領域でも、書く活動を意図的・計画的に設定したことが、改善の要因として考えられる。</p> <p>学学習に対して、めあてと見通しをもち、課題解決に向けて、ねばり強く取り組む姿勢が身に付いた。また、年間を通じて、読書活動の充実に力を入れたことも効果的であった。日々の意欲的な学習姿勢が、各単元のワークテストの結果にも成果として表れている。ただ、言語化に関する能力、及び、読解力については、十分身に付いてはいない。</p> | <ul style="list-style-type: none"> 授業における学習規律、及び、家庭における学習習慣がまだ確立、定着していないこと 授業中の発言、自力解決等、意欲的に取り組む児童が多いが、個人差もあること 文章構成や語句の使い方を手がかりに、筆者の主張、主題や要旨を読み取る力がやや不足していること 問われていることを的確に捉え、自らが伝えたいことを効果的に表現するための文法(主語、述語、接続詞等)が十分に身に付いていないこと 漢字の習得に個人差があること | <ul style="list-style-type: none"> 発問、指示を工夫し、児童同士の充実した学び合いを促せるようにする。 話型を活用し、考え・意見を発表し、交流する場を設けることで、児童自らの考えや意見を相手に伝えられるようにする。 作文の書き方の基礎・基本の指導を徹底する。 説明文の指導において以下のことを重点的に行う <ul style="list-style-type: none"> 文章構成を捉える。 ・事実と意見を弁別する。 主張や主題を捉える。 ・文法を理解する。 要約文を書く。 話し合いや意見を交換する活動を取り入れ、考えを発表する場を作る。 音読を繰り返し、聞き手を意識した声の出し方を練習させる。 朝学習や漢字検定を通して、漢字の定着を図る。 毎日、書く活動を取り入れ、自分の考えを表現できるようにする。 | <ul style="list-style-type: none"> 発問、指示を工夫し、児童同士の充実した学び合いを促せるようにする。 話型を活用し、考え・意見を発表し、交流する場を設けることで、児童自らの考えや意見を相手に伝えられるようにする。 作文の書き方の基礎・基本の指導を徹底する。 説明文の指導において以下のことを重点的に行う <ul style="list-style-type: none"> 文章構成を捉える。 ・事実と意見を弁別する。 主張や主題を捉える。 ・文法を理解する。 要約文を書く。 話し合いや意見を交換する活動を取り入れ、考えを発表する場を作る。 音読を繰り返し、聞き手を意識した声の出し方を練習する。 朝学習や漢字検定を通して、漢字の定着を図る。 毎日、書く活動を取り入れ、自分の考えを表現できるようにする。 「ドリルパーク」を授業で計画的に活用する。小単位ごとに「確認テスト」を実施し、その結果を受けて個別課題の出題を行い、児童一人一人の理解度に合わせたフォローアップを行う。 定期的に「ドリルパーク」を宿題として位置づけ、家庭学習の充実を図る。 | <p>調問題の内容別正答率について、前年度からの経年変化をみると、領域別、内容別、観点別、すべての観点において正答率が上がった。特に、書くことに関する事項は、正答率が前年度よりも30%上昇した。「一人読み」の場面で、叙述に即した自らの読みを言語化させる活動を継続して取り組んだことが効果に表れた。また、国語科で書く活動を充実させたことはもちろん、他教科・他領域でも、書く活動を意図的・計画的に設定したことより改善を図ることができた。</p> <p>学学習に対して、めあてと見通しをもち、課題解決に向けて、ねばり強く取り組む姿勢が身に付いた。また、年間を通じて、読書活動の充実に力を入れたことも効果的であった。日々の意欲的な学習姿勢が、各単元のワークテストの結果にも成果として表れている。</p> |
| 6 | <p>算数</p> | <p>調問題の内容別正答率では、いくつかの領域・観点において、目標値よりも高い正答率を示した。特に、分数のたし算・ひき算では、目標値よりも3.2%高い正答率となった。学力向上加配の配属により、習熟度別指導、及び、個別指導の充実が図られたことが、学力の向上につながったと言える。また、学習内容の定着に向けた放課後学習(補習)を計画的・継続的に実施できたことにより、基礎的・基本的事項の定着が図られたことも、改善の要因として考えられる。ただ、基礎的・基本的な内容の習得が十分でない児童の割合も少なくない。学習習慣が定着していないことが原因であると推察される。</p> <p>学日々の学習においては、習熟度別指導による個別指導の充実、及び、ペアやグループによる学び合いの場を多く設定したことも、効果的であった。習熟度別指導、及び、学力向上加配の担当者による、実態分析に基づいた学習材の準備と、専門性に裏打ちされた教材研究、学校全体へのコーディネートが、学力向上を支えた。ただ、個別指導が必要な児童が多数いる現状を考えると、学力向上に向けて、習熟度別指導の充実を図る必要がある。</p> | <ul style="list-style-type: none"> 授業における学習規律、及び、家庭における学習習慣がまだ確立、定着していないこと 個別指導を要する児童の割合が多いこと 基本的な知識、技能の定着においては、個人差がかなり見られること 問題場面を捉えたり、既習事項を活用して問題を解決したりする力がやや不足していること 自分の考えを式や図、言葉を使い説明できる児童が少ないこと 四則計算が正しくできず、分数や小数の計算でつまづきが見られること 既習事項が十分に定着していないため、完答に結び付くまでに至っていないこと | <ul style="list-style-type: none"> 互いに考えを伝え合い、話し合うことにより、自らの考えや集団の考えを高め、発展させられるような授業展開ができるよう工夫する。 課題提示を工夫することによって、児童に解決の見通しをもたせ、自ら学んでいけるようにする。 算数的活動を工夫することによって、課題の発見と解決に向けて、主体的・協働的に学んでいけるような学習活動を推進する。 学習の振り返りの活動を授業の中に位置付け、成果の確認や次の学習への見通しをもてるように習慣付ける。学習内容の定着を図るため、ドリルやプリント等で繰り返し練習を行う。 問題解決型の学習を計画的に取り入れる。 問題を数直線や図等に表し、解決させる指導を繰り返す。 習熟度別の学習ではレディネステストを使ってクラス分けを行い、個に応じた指導をする。 朝学習や放課後学習、補習の時間等を使って、基礎・基本の定着を図る。 ノート指導を通して、理解が深まるまとめ方を指導する。 | <ul style="list-style-type: none"> 単元テストの分析(観点別の得点分布・平均点から)を全単元で行い、次の単元の指導に生かした。 特に、問題文の情報を比較したり関連付けたりして読み取る力や、限られた情報から問題の答えを推論して解決する力を身に付けられるようにする。 習熟度別指導において基礎・基本の定着を図るために、ICTの効果的な活用、指導事項のスマールステップ化、補習の実施等、より丁寧な指導を講じる。 前学年までの学習内容の定着に向けて、単元の導入に復習に取り組んだことにより、既習事項、基礎・基本の定着が図られつつある。 課題解決に向けて、考えを巡らせて解法を探り、ねばり強く解決しようとする姿勢が身に付いてきた。 作業的学習を多様に取り入れる。(操作活動、図表の制作等) グループ学習や集団学習を多様に組み込む。(協力して学ぶ場、話し合える場) 単元の終末に、学習のまとめ、復習の時間を設定し、学習内容の定着を図る。 「ドリルパーク」を授業で計画的に活用する。小単位ごとに「確認テスト」を実施し、その結果を受けて個別課題の出題を行い、児童一人一人の理解度に合わせたフォローアップを行う。 定期的に「ドリルパーク」を宿題として位置づけ、家庭学習の充実を図る。 | <p>調問題の内容別正答率について、前年度からの経年変化をみると、領域別、内容別、観点別、すべての観点において正答率が上がった。また、目標値との比較においてもすべて上回った。特に、図形領域では、正答率が前年度よりも20%上昇した。習熟度別指導および個別指導の充実を図ったことにより、学力の向上につながった。また、タブレット端末を活用したドリル学習を計画的・継続的に実施できたことにより、基礎的・基本的な学習内容の定着を図ることができた。</p> <p>学日々の学習においては、習熟度別指導による個別指導を充実させたことや、ペア・グループといった学習形態での学び合いの場を多く設定したことが効果的であった。習熟度別指導担当者が、児童の学習状況の実態をきめ細やかに分析し、教材の準備だけでなく学校全体で共有することで、学力向上につながった。</p> |
| | <p>音楽</p> | <ul style="list-style-type: none"> 歌うことが好きな児童が多く、伸び伸びと表現したり、楽曲に対する自己のイメージを膨らませたりしながら鑑賞している。 校内アンケートの結果、低学年は 88 パーセント、中学年は 84 パーセント、高学年では 93 パーセントの児童が、音楽科の学習に対して肯定的に評価している。 | <ul style="list-style-type: none"> 技能や階名などの知識が十分に定着していないため、学習に対して苦手意識をもっている児童もいること 楽曲の特徴などを生かしながら音楽表現を工夫したり、思いをもって表現したりすること | <ul style="list-style-type: none"> タブレット端末の活用、担任等との連携を通して、個に応じた指導を充実させ、基礎基本の定着を図る。 親しみのある楽曲を扱ったり、スマールステップで学習活動を展開したりすることで、学習への興味や意欲を引き出す。 表現、鑑賞ともに、音楽を特徴づけている要素に着目させるような学習活動を推進する。 | <ul style="list-style-type: none"> リコーダーや合奏の学習では、模範演奏動画を撮影し、タブレット端末上で児童に配布することで、個別学習の充実を図っている。 曲想を表す言葉を提示したり、比較させたりしながら言葉を選ばせることで、児童の言語活動を充実させるとともに、音楽を特徴づけている要素に着目させるよう、発問や学習の展開の工夫を行っていく。 | <p>学コロナ渦のため、歌唱やリコーダー、鍵盤ハーモニカの学習は制限がかかったが、オルガンや木琴等の鍵盤楽器を使用し合奏を行ったり、リズムの学習に取り組んだりした。</p> <p>学音楽づくりではタブレット端末を活用することで、試行錯誤が容易になり、児童の思考を深めたり、意欲的に活動させたりすることができた。</p> <p>学鑑賞では、音楽を特徴付けている要素に基づき、体を動かす活動を多く取り入れている。</p> |

| | | | | | |
|-----------|--|---|---|--|---|
| <p>図工</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・図工の時間を楽しみにしている。 ・校内アンケートの結果、低学年は98パーセント、・中学年は93パーセント、高学年では98パーセントの児童が、図画工作科の学習に対して肯定的に評価している。 | <ul style="list-style-type: none"> ・「絵に表す」活動への苦手意識が強い児童が多いこと。 ・図工や他教科での既習事項と、現在の学習活動を関連付けてとらえること。 | <ul style="list-style-type: none"> ・関連する題材(粘土で立体につくったものを絵に表す、あるいはその逆など)を意図的に配置して、絵に表す活動への抵抗感を減らす。 ・全体や個別の指導の際に、既習事項や身近な事象との関連について、常に示唆する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・児童による授業評価では、「図工の学習はやりがいがあるか」どうかに対し93パーセントの児童が肯定的に回答している。一方、否定的な回答をした通常級9名の児童には、特別に支援が必要と思われる。毎回の授業の中で必ず声をかけ、注意深く支援していく。 | <p>学 平面と立体の表現を関連づけて指導したことで、児童がスムーズに絵に表す学習に取り組むことができた。引き続き次年度も計画する。</p> <p>学 児童の興味・関心・意欲を高めるためにICT機器の画像は効果的であった。次年度も引き続き活用する。</p> <p>学 既習事項や他教科での学習との関連については、結び付けて理解することが難しい児童が多い。今後も繰り返し指導する。</p> |
| <p>特支</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・どの学年の児童も興味・関心のある活動には、進んで取り組むことができる。また授業の流れや活動の見通し、取り組み方法が分かれば落ち着いて取り組むことができる。 ・新しい課題を達成することをとても楽しみにしている。 | <ul style="list-style-type: none"> ・自信がもてない活動へは、取り組むことが難しく、途中で投げ出してしまうこと ・1～3年生の児童においては、特に集中して取り組むことができる時間が短いこと | <ul style="list-style-type: none"> ・児童の興味・関心を生かした単元計画を作成し、スモールステップの学習課題を設定し自信を高めていく。 ・活動への見通しと学習方法に関してICT機器を活用して視覚的に分かりやすく示し、安心して取り組めるようにする。 ・児童一人一人にあった教材や学び方を提示する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・児童の興味関心を高めるための単元指導計画を各グループで作成したことで自信をもって学習課題に取り組むことがでいる児童が増加した。今後もより実態に即した単元計画の工夫を行っていく。 | <p>学 児童の興味関心や認知特性に応じた動機づけやICT機器を活用した視覚的支援は課題に意欲的に取り組むために有効であったので、今後も支援の方法を工夫していく。</p> <p>学 実態に合わせた単元指導計画の作成を継続していくことが基本的学力の定着にもつながってきている。</p> |

調…新宿区学力定着度調査の結果から見える学習状況

学…授業での様子や提出物、作品、ワークテスト等から見える学習の状況

※分量は2ページ以上となってもよい。